





## 【6/11 総代会報告② 震災地から組合員へ】

### 岩手県大船渡市 綾里(りょうり) (有)コタニ 小谷善次会長 「消費者組合員からの励ましの言葉をたくさん頂き、 再開への第一歩という状況まで来ました。」



岩手県の大船渡の綾里という町から来ました。わかめの生産が盛んな街です。

この度は常総生協の組合員の皆さん、理事さん、職員の皆さん、本当にありがとうございました。過大なるお見舞金を頂きまして、それは形に残るものとして会社の財産の一つにして営業していきたいと思っています。

先ほど石巻の高橋社長からお話がありましたが、本当に大きな被害を受けまして、どこから手をつけていいのか、それがまず分からないということ、これが実感でありました。

でも、生協の会報でもご案内して頂きました通り、会社の形が部分的に残りました。また従業員は、綾里の工場には当時作業員が20人おりましたが全員無事に近くの中学校の体育館に避難しておりまして、私はちょっと離れた大船渡におったのですが、夕方無事に合流することができまして、まず、人的な被害がなかったもので、ここで一つ再建の目安が付いたのかなと思っています。

従業員全員が「ぜひ仕事に復帰して働きたい」という意思が非常にありましたので、「これはもうやらなければならない」ということで、その場でもって復興の決意をいたしました。

本来は、すぐに手をつけたい状況だったのですが、まずは瓦礫がひどくて手が付かないという状況で、1週間10日は、何もせずに避難生活を過ごした状況です。

私どもの地域は、石巻の高橋さんの地域に比べて、若干復興のスピードが速いように感じます。1月ちょっと経ちましたら、水道がまず入ってきました。それからまた1ヶ月後には電灯だけですけれども、電気が通りました。

瓦礫を取るのがまず第一だと思うんですが、瓦礫を取る重機が少ないということで、土建屋さんがいる地域から手をかけるということで、私どもの地域はたまたま土建屋さん大手が2社おりまして、その重機が動き出したということで早く回復できたんじゃないかと思

います。

私ども今後、今まで何十年と常総さんにもかわいがっていただきまして、今まで三陸の、特に岩手県海藻を安全安心で買っていただくということでやってまいりました。

残念なことに、今年ちょうど3月がわかめの収穫の時期にあたっており、ちょっと生育が遅れていたもので、3月の5日6日頃から収穫にあたっておりました。

その始まった矢先の事故で、今年の三陸のわかめは採る手前でやられてしまいました。

今年の生産はゼロということで、去年確保した在庫の中でも被災しなかったほんの一部分だけ残ったという状況でございます。

生協の会報でもご紹介して頂いたんですけれども、今年は、今まで供給させて頂いておりました商品を継続して出すというのはちょっと不可能なために外国ものを含めながら、また新物が出るまでかわいがっていただければと思っています。

手前どもの状況は3工場と冷蔵庫冷凍庫あったんですが、冷蔵庫冷凍庫・倉庫は流出したり全壊したりしましたが、おかげさまで3箇所の工場だけは幸いに形だけは残りました。

そのうちの冷凍庫とパック工場が先週稼働できるような状況になりまして、6月6日からチームを組んで少しずつ掃除を兼ねながら作業を始めようかということで、第一歩という状況までなりました。

今後ともしっかりした商品の提供に努めてまいりますので、今まで以上にかわいがっていただきたいと思っています。

最後になりましたが、組合員のみなさまから大変な高額の義捐金を頂き、また、励ましのお言葉をたくさん頂きました。

生協の職員の皆様からも「応援に行きよ！」と再三声をかけていただきまして、商品部の藤田さんをはじめ、工場にも見舞いに来ていただきまして、大変心強く思っています。

今後ともひとつ末永いご援助とご協力をよろしくお願い致します。これでご挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

## 石巻まるたか水産(荻浜のカキ) 高橋雄治専務

### 「今年の生ガキは無理かと思いますが、頑張って再建模索していきます」

宮城県から参りました、まるたか水産の高橋です。

この度は組合員様、温かいご支援を頂き、また、熱いお言葉を頂戴いたしまして誠にありがとうございます。私のところは石巻なんですけれども、津波は1メートルくらいしかこなかったんですけれども地盤が1メートル沈下で、毎日海水が入ってきている状態です。



全滅した荻浜のカキの漁師 高橋さん

常総生協の組合員のみなさまには荻浜の生牡蠣を食べて頂いておりますが、津波でいかだ、漁具関係が全て流されているものですから、今期の生牡蠣はちょっと無理かなと思っています。

3月11日の時は、うちでわかめもやっておりまして、わかめを刈って二日で、震災が来たものですから今年作る塩蔵わかめは絶望的な状態です。

その中で再建のために色々頑張っている状態です。社員一同頑張っていきますのでよろしくお願ひいたします。

毎週、東北被災地・避難所へ有機野菜を届けている茨城有機農研を代表して

## 石岡(やさと)の魚住道郎さん(日本有機農業研究会副理事長)

### 「生命の道」・・・震災で亡くなられた方への鎮魂、 未来を託す子供たちに贈る歌を歌います。



魚住さん

皆さんこんにちは。魚住と申します。私は常総生協の一組合員でありまして、来賓の席に座るとい立場の者ではありません。

今日、こういう会にお招きいただきまして、皆さんと一緒に、今までの取り組みをもう一回底辺から見直して、もう一回大震災後皆さんと一緒に生き抜いていければいいと思ってやりました。

今、高橋徳治の高橋さんやあいコープふくしまの佐藤さんから、被災地のメッセージを伺っているうちに涙が出てきて・・・。いっぱいしゃべりたいことはあったのですが、まとまりません。

大石さんが、震災直後にすぐ、被災地に駆けつけようということで、戸頭の店にある品物をトラックいっぱい積んで、その、機動性というか、おつちよこちよい性というか、私は、こういう人いいなと思います。

今、私たちができることを、静かにやり続けることかと思

今日、皆さんの前で「生命の道」という歌を歌います。

この「生命の道」という歌を作った人は、熊本県水俣市で当時水俣中学の教員をやっていた高橋あきらさんという方なんです。私がこの歌と出会ったのがちょうど25年前、チェルノブイリの原発事故のあった翌日です。

たまたま広島島の友人を訪ねた時にチェルノブイリの事故をタクシーの中で聞きました。

その翌日に水俣病発生公式確認30年の行事が水俣市であったんです。その時に、作家の水俣さんが、若狭の原発の話がされました。作家として最初に世に水俣病を問うた



「生命の道」を歌う魚住親子

が、「海の牙」という小説で、彼は、漁民に寄り添いながら作家活動を続けました。水俣から30年経って、僕たちに、その原発のこともしっかり言われて、これでいいんですかっていう問いかけをされて、講演を終えられました。

この時、教師の高橋さんが、子供に当日歌うように指導していたんです。子供たちが歌ってくれたのがこの歌で、その子供たちは水俣の水銀汚染濃度の高いところの本当にそこで暮らしていく若い子供たち・・・汚染から逃れられない、見た目は本当にきれいな海のそんなところで暮らしている子供たちに教師が託した歌です。

私は、この歌をぜひ皆さんと歌い続けていけたらなと思って、今日、皆さんの前で歌わせていただきたいとお願ひしました。

今回の大震災の被災者、亡くなられた方への鎮魂の歌、未来を託したい子供や若者たちへの希望の歌として聴いていただけたらと思います。